



祐介の目

No.168

大田祐介（福山市議会議員）

じつは私は現職市議の中で最もヤジられた経験のある議員だと思う。初当選後に急遽市長選となり、私の父が立候補した。現状維持派と改革派の一騎打ち、激しい選挙戦だった。結果は私の

議場のヤジ

私はヤジ肯定派であり、ヤジ禁止など議会としてあり得ないと考えている。と書くとき、眉をひそめる方もいるだろう。しかし、議場は議論の場であり、様々なバックグラウンドを持つ議員の集まりにおいて、発言を巡って賛同意見や異論・反論が不規則発言（ヤジ）として発出されるのは当然のことと感じる。そして議場における整理権は議長にある。審判役の議長が問題のあるヤジと思えば制止するし、発言者や他の議員が議長にヤジの制止を求めることもできる。

それでも納得しない人がいるだろうからプロ野球に例えてみる。審判の判定に文句が言えるのは選手・監督のみだ。観客がいかに騒いでも、まさに「外野は黙っている！」の世界である。議員も一緒に自説を通すためには少々のヤジに負けてはいけない。議場と球場は同じく真剣勝負の場であると私は感じている。

父の負けであったが、選挙は終わっても「ノーサイド」にはならない。議会に行くとき市長派の議員が私を目の敵にし、市長も対立候補の息子であるから仇敵として私の質問に過剰に反応する。つまり私が質問に立てば、前からは市長と副市長、後ろからは市長派議員からヤジの集中砲火であった。なにくそと勉強して理論武装して質問を繰り返して、2期目になると市職員と対等に議論できるようになつていった。もう20年前の話であり、私をヤジった人達はすべて過去の人となったが、今更ながら感謝している。あの状況を克服できたから今の自分がある、ありがとうございました。

国会のヤジも激しいが、賛否が分かれ議論が白熱している証拠と感じる。市民は議事録に残らないヤジより市議会で何が議論されているのか、その本質に関心を持って欲しい。ただし議会の品位を損なうようなヤジや、人格を否定するようなヤジは慎むべきだ。